

具象的な言葉から抽象的な言葉へ

幼児は“具体的な形を備えた実在”を表わした言葉は、すぐに理解し、覚えませんが、抽象的な言葉はなかなか理解できません。だから、言葉の与え方としては、“易から難へ”という原則に従って、具象的な言葉を十分に与え、だんだん抽象的な言葉に進めて行くという手順を取ることが大切です。

よく“鳥”とか“虫”という言葉が幼児に何気なく教えています。が、“鳥”という鳥や“虫”という虫は現実には存在していません。存在するのは、鳩、鶴、鶏であり、蜂、蟻、蛇です。それなのに、これらをすべて“鳥”“虫”と教えたのでは、幼児にはとても理解できません。こんなに形も大きさも違うのに同じ名前を与えられたのでは、頭の中が混乱するばかりです。幼児がごみを見付けて「むし、むし」と言うのは、無理からぬ判断だと思います。

鳩だったら「これは鳩よ」と教え、蟻だったら「これは蟻よ」と言って教えるべきだ、と思います。そうすれば、幼児はすぐにこれを理解し覚えます。形や大きさはほぼ一定しています

から、一度教えたら見違えることはありません。

こうして、鳩や鶴や鶏や雀や鳥を覚えたら、それらに共通する“翼がある”“全身羽毛に覆われている”“足が二本”そういう認識を通して初めて“鳥”という言葉が教えます。鳩、鶴などの下位概念を理解した上で、初めて鳥という上位概念が理解できるのです。

そうすれば、初めて“オウム”や“カナリヤ”を見ても、「名前はわからないが、鳥の仲間だ」ということだけは判断できるようになります。

鳥や虫に関係なく、これら同じ仲間のことを「一つ、二つ」と言って数える“数”は、さらに抽象的な言葉です。鳩や蟻から鳥や虫という抽象化を十分に図った上で、“数”を教えることが大切です。十分に抽象能力を育てることをせずに、数を教えるべきではありません。